

今あるテクノロジーを使って 生徒の関心を呼び起こしたい

長崎県立五島高等学校 数学科教諭

榎本英人



かしもとひとと
長崎県立長崎東高等学校を卒業後、長崎大学教育学部へ。2008年卒業。鶴鳴学園長崎女子高等学校、長崎県立諫早高等学校を経て、2014年に長崎県立五島高等学校へ赴任。現在2年生を担任、吹奏楽部顧問。

ベテラン中心の前任校 若手が多い五島高校

五島市の中心市街地にある石田城址。豊かな水をたたえる濠と石垣に囲まれた城跡にあるのが長崎県立五島高等学校です。五島高校の数学科教諭である榎本英人さんは長崎大学教育学部の卒業生です。

「以前は県立諫早高等学校で教鞭をとっていました。どちらも進学校ですが、ベテラン教員が多かった諫早高校に比べ、五島高校は平均年齢が若いのが特徴です。ここでは指導方法や中期プラン作成の会議でも若手のうちから中心的な役割を担うので、自分

の提案が実現しやすい環境です」。昨年、三年生の担任で、教員二人、長大教育学部に入りました。

教育はコミュニケーション そう気づいて教員に

「五島高校の生徒はみんな素直

「几帳面!? 僕、全然几帳面なんかじゃないですよ。自分の部屋は散らかっているし。でも教室ではゴミは絶対に落とすなといった細かいルールを決めたらひたすら愚直に守っていますね。だって、自分の生活習慣を押し付けてはいけません。進路や生活指導もそうですが、「悩むことがあったら生徒のためになる方」という考え方は、前任校の指針でした。それをこちらでも実践している感じですよ」。

そのほか学校全体の情報処理システムにも関わっており、ICTの知識は自分の強みになっていると実感されているそうです。

高校のころから教員を目指していたのでしょうか。「それはそうなんです。最初は教科を教えたいという軽い気持ちでした。でも大学時代、ア

ルバイト先の先輩の影響もあって視野が広がりました。就職活動も一般的な会社やマスコミ関係などいろいろなチャレンジして、それでふと気づいたんです。僕

が興味を持っているのはコミュニケーションなんだから。考えてみると教育って人間同士のコミュニケーションがすべて。正解がないなかで、お互い話をし

で人のことをよく考えている。住まいが近くて環境も似ているせいでしょ。逆に言えば競争をあまりしたくない。それは島の特質かもしれません。どこに行っても生徒がいるし、先生同士の飲み会に保護者の方々も来られるんですよ。最初かなり面食らいました。五島は人が近い地域密着型だから、指導も生徒との距離感を意識的に詰めて当たります。それに高校生ともなれば対等な大人だから真剣勝負、隙は見せられない。榎本先生は数学のほか、情報の教科も担当されているとか。「はい。二年生には数学、一年生にはパソコンの使い方や画像

ながら生徒が良い方向に行くように探っていく。ああ、そういうことができるなら、やっぱり僕は教員を目指そうと。結局、教員免許も小学校、中・高校の数学、情報教科まで取りました。そういう逡巡ができた大学の四年間は、ある意味貴重な時間でしたね。

「本当にそう思います。生徒にはアンテナを張っているいろいろな情報を仕入れて自分の興味のあることを見つけてほしいとよく言っています。その目標を達成するための勉強だ。」「この勉強って本当に必要なの?」ってよく言うでしょう?特に数学とか。でも今はわからなくても、どこかで役に立つ。先を見据えて行動し、将来を考えて勉強する時期なんだよ。そういう意識で大学に行けば充実するはずなんです。メリハリをつけられれば大学って本当に楽しいところだから。メリメリとか、ハリハリだけじゃダメだね(笑)」。

五島高校の総合学習では、島の活性化を考える「パラモンプラン」なるプロジェクトがスタートしたばかり。これから新しい企画が生まれて来そうです。自然体で愛情を注ぐ榎本先生のもとから巣立った五島人が、島の未来を背負って立つ日もきっと近いでしょう。

